弓と日本人・序章

夢野一太郎

はじめに

　弓とは食料である獲物を獲るためにとても有効な道具であり、人間同士の戦いにおいても、鉄砲が発明されてもしばらくは主要な武器であった。例えば日本の戦国時代には大いに鉄砲が使用されて、戦国大名の力は鉄砲で決まったかのように言う人がいる。しかし、実際は弓矢による戦いに大きなウエートが置かれていたらしい。戦国時代の鉄砲はアメリカの西部劇で使っているようなライフル銃と比べて、精度も飛距離も連射能力においても威力もまるで劣っていた。NHK[風雲！大歴史実験　真田丸徳川撃退の秘密」では当時の火縄銃では３０メートルを超えると精度が落ち、また一発撃つと、次の弾を撃つには２０秒かかったという。これは弓との比較においても精度や連射能力で著しく落ちることになる。ホープという人物が１９２３年におこなった世界各地の弓の飛距離を比べた実験では、和弓の飛距離は１４２，６メートル。１６世紀の火縄銃は私たちが想像するよりも殺傷能力が低かったのではないだろうか。歴史家によっては戦国時代の火縄銃は、殺傷能力よりも爆発音による馬や人間に与える心理的効果が大きかったという人がいる。弓矢は長い間、戦争において主力の武器であり続けた。だからその弓矢を調べれば、それを使っている民族や国民の生業だけでなく、文化も理解できる方法の一つにならないだろうか。特に日本の弓は世界と比べて極めて特殊な形をしている。大きく見て、弓の握る部分が短下長上なのだ。これはアジアやアマゾンなどで海や川の畔で魚を獲って暮らしている人たちが使っていた弓と同じだという記録がある。水の中の獲物を水上から獲るためには、弓の中央よりも下に矢を置いた方が獲物を狙いやすい。また、水の中では水の抵抗力が大きくて、短い弓はすぐに威力が無くなってしまうので、長い矢の方が有利なのだ。長い矢を射るには長い弓がいる。ちなみにライフル銃で撃った弾も、水の中では２メートル以上進むと殺傷能力が無くなってしまうと実験が衛星放送のニュースでやっていた。長くて短下長上に使う日本の弓は水の中の生物を獲るのに有効な弓ということだ。しかし、現在の世界の民族や国の弓を見るとほとんどが弓の中央に矢を番えているように、陸上の動物を獲ったり、人間同士の戦いでは中央に矢を番えるほうが有利だと思うのだが、なぜ日本だけが短下長上の弓に拘り続けて来たのだろうか。逆に、この特殊な弓の歴史を調べれば、日本人のルーツがわかるのではないだろうかと思いついた。そこでいろんな文献を調べたのだが、弓はもともとが木でできていたので、古い物ほど腐って残っていない。
また、弓から弦をはずすと真っ直ぐになってしまい、弦を張った時の状態がわからないということもあって、弓に関する書籍や考古学的遺物が少なくて、私のような素人ではすぐに行き止まってしまって頭を抱えている。
　しかし、現代世界にほとんど類例がない特殊な形をした弓を伝統的武術としているところに、日本人独自な文化や気質といったものが見て取れるような気がして、誰か弓矢の本格的研究をして欲しいという願いから、自分がわかった範囲だけでも電子書籍にして、多くの人への問いかけとしたい。もし、この本を読んで、この程度なら自分の方が詳しいよとか、もっと本格的な物が書けると思う方がいらっしゃったら是非とも書籍にして欲しい。必ず買って読みます。

　これから展開する話は、主に松尾牧則「弓道　その歴史と技法」（日本武道館）によっている

。またこの本から多くの絵を引用した。引用した絵は巻末にその引用した書籍をまとめてい載せているので、興味のある方は、直接その書籍で調べて欲しい。

各国の弓の形

　現在、国技として弓術がおこなわれている国がたくさんあるので、「弓道」からその様子を見てみよう。「弓道」では弓の材質や射術なども詳しく解説しているが、ここでは弓の形を先ず注目してもらいたい。和弓の特異性がよくわかるとともに、何故日本だけが少なくとも弥生時代から現代まで短下長上の弓に拘ってきたのかとても興味が惹かれるし、そこにやたらと非対称な物を好む日本人の特質を感じる。

　「弓道」によると、弓の形による分類では直弓、彎弓、半彎弓と３種類ある。その特徴は「直弓は弦を外した時に弓の幹がほぼ真っ直ぐでな形状で、弦を張ると全体がほぼ同率に曲がるような弓をいう。単一の材料を用いて作られた弓（単身弓）に多いタイプである。《中略》彎弓は、弦を外した状態では、弦を張る方向とは反対側に多きく反った（彎を持った）弓のことで、、いわゆる裏ぞりのある弓のことである。トルコ、インド、韓国、中国の弓などに代表されるが、これらは彎弓の中でもその反りがたいへん大きい。また、弓の両端に強い反りがあり反曲弓（反射弓）に分類されることもある。トルコや韓国の弓では弦を外すと弓幹が反り返ってＣ字型や円形になるほどの裏反りをもって作られている。《中略》伏竹弓を経て、三枚竹弓や内部にひごを用いた現在の日本の弓にも裏反りがあり、彎弓に含めることができる。しかし、その裏反りはトルコや韓国と比べると多少の裏反りがある程度なので、彎弓のなかでも半彎弓として分類される。」（松尾牧則「弓道」その歴史と技法」。）この彎弓という言葉はあまりなじみがないので、分かり易い例を挙げると、キューピッドの持っている弓がそうだ。

図１　キューピッドの持つ弓

図１のキューピッドは恋の矢を対象者に打ち込むのだが、彎弓は小さくても弓の反発力が大きいので威力がある。現実に使われている彎弓の写真でここに引用できる手頃なものがないので申し訳ないが、弦をはずした物なら国立民族学博物館にモンゴルの弓矢があるので、その写真を載せよう。

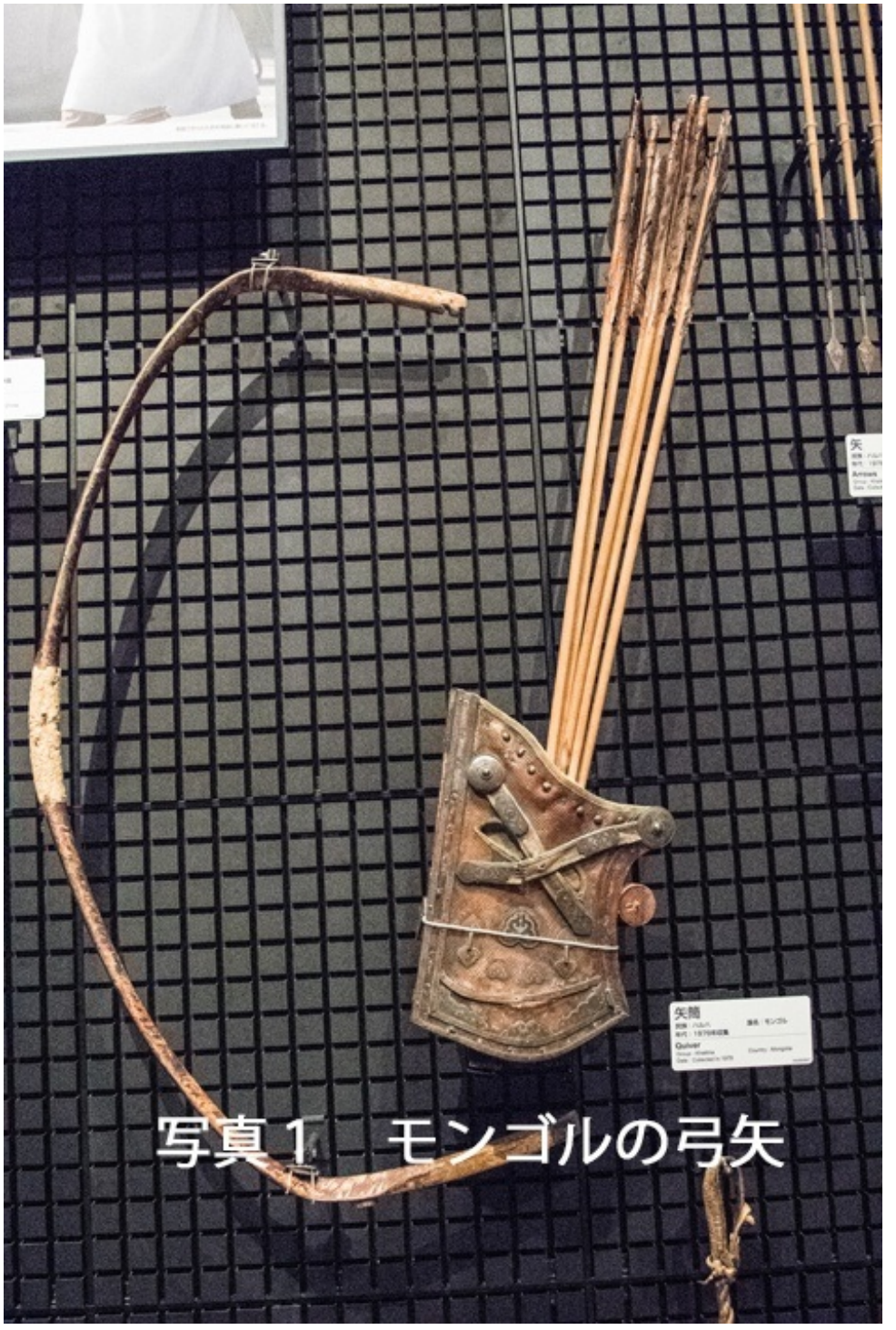


写真１　モンゴルの弓矢

使用する時は、彎の外側に向かって弓を引っ張り弦を取り付けると、キューピッドの弓のような弓になる。矢も弓も和弓と比べるとかなり短い。馬上で使うにはこれぐらいの方が扱いやすいだろう。日本でも流鏑馬で使う弓は、通常の和弓よりかなり短い。

　さて次に和弓を見てみよう。

図２　日置弾正正次瑠璃光坊威徳像（重野家蔵）

図２は１６世紀頃実在したとされる日置弾正の画で、日置弾正は貴族階級の形式的なものではない、実践的な射法を確立した人物と言われている。図２を見ると明らかに弓の中央から下を握

って矢を番えている。そして、弓の形は中央から下に矢を番えた時に最も力が出る（張力が強い）ように形を加工されている。しかし、この形から見ても、和弓を正確に射るにはかなり高度な技術がいりそうだ。手先が器用だといわれる日本人でも高度な修練が必要な難しい形に、何故日本人は拘り続けてきたのだろう。

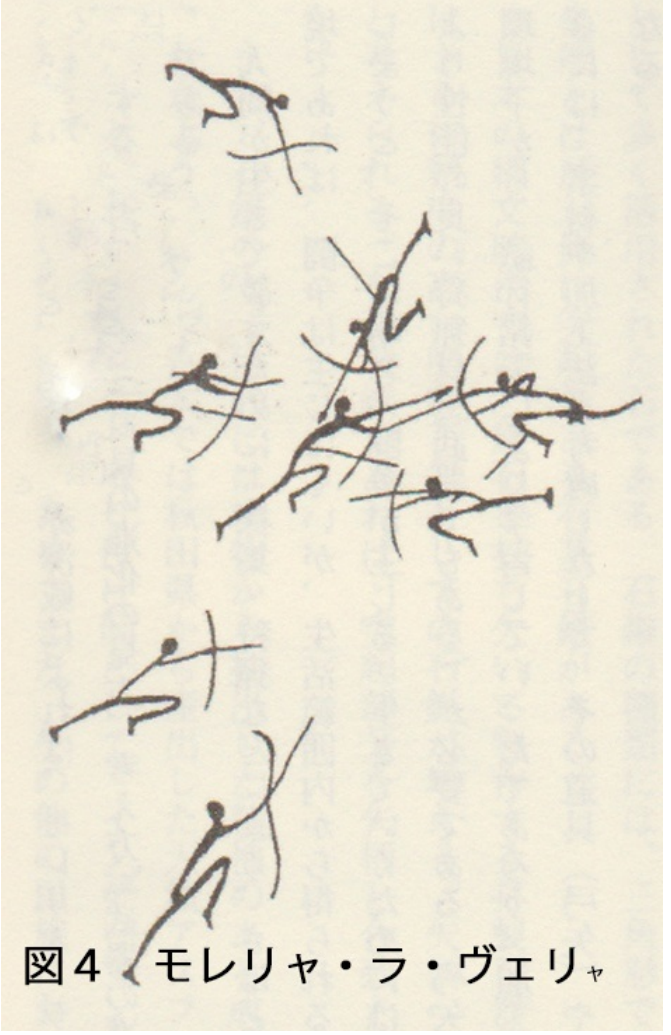
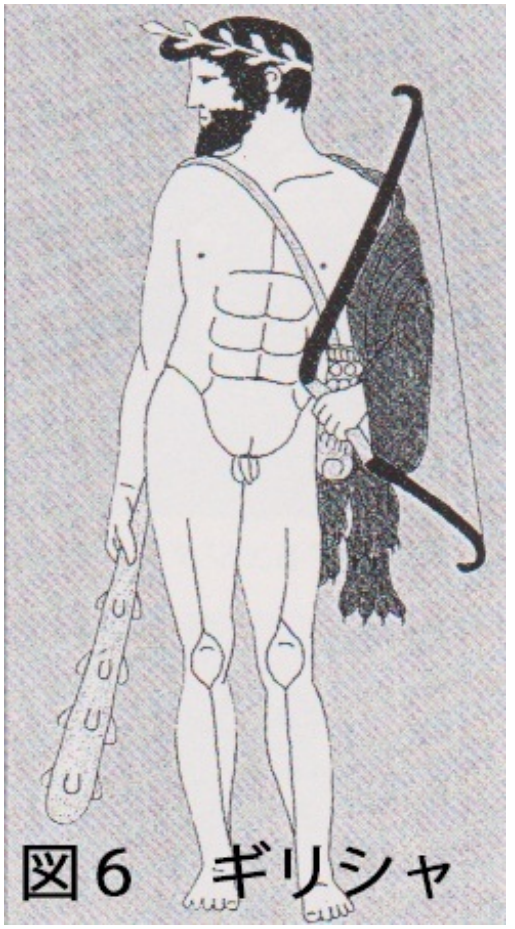
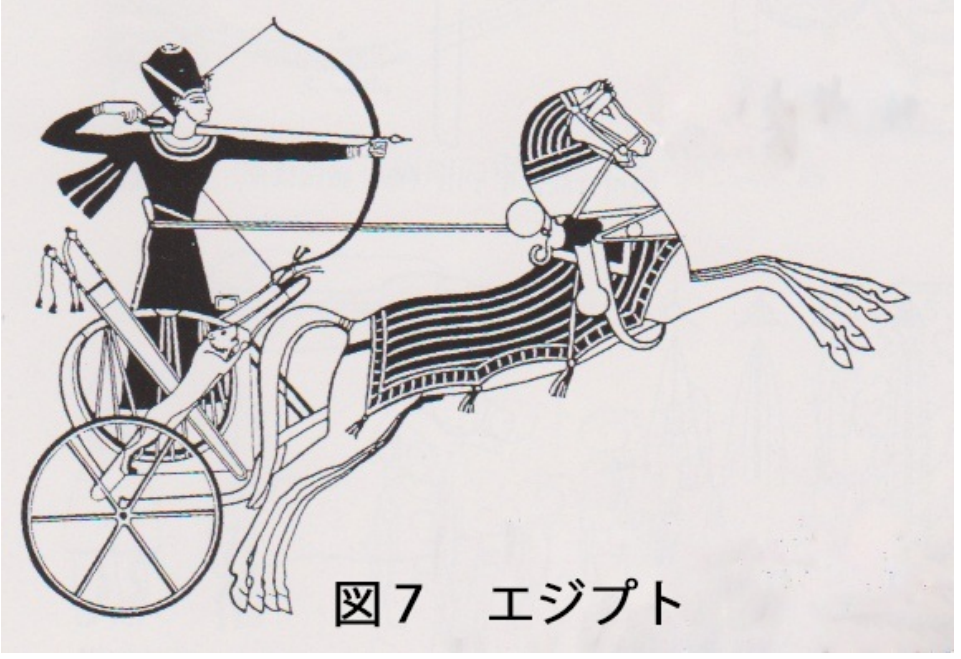
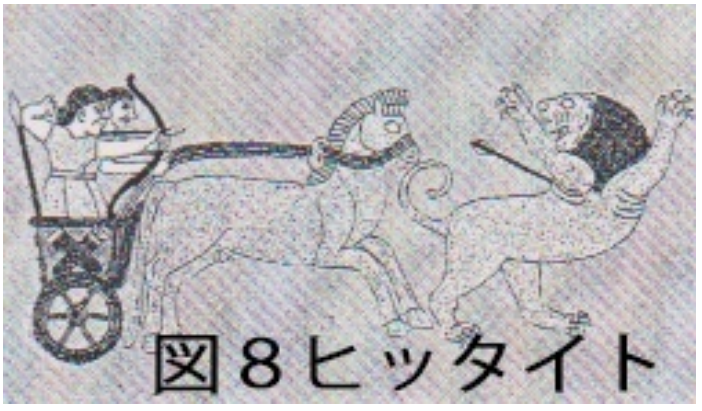


図３はスペイン東部で発見された１万年前と推定されている壁画。

図４は１万年前以降、旧石器から新石器への移行期と推定されている壁画。







　ヨーロッパでは１万年前から中央に矢を番えた射法をしているが、「弓道　その歴史と技法」では原初的な弓は木の枝に弦を張った直弓だが、木の枝はもとと先では太さが違うので太い方にずらして射る方が弦や弓の張力を効果的につかうことができるので、真ん中ではない部分で矢を番えたかもしれないとしている。
　図４では弓を使った集団の戦い（戦争？）のように見えるが、同じ頃の日本（縄文時代）ではそういった共同体間の争いで、多くの人間が死ぬような大きな争い（戦争？）はなかっただろうと考古学者は言っているので、図４はひょっとして宗教的な儀式・祭礼ではなかっただろうか。それともヨーロッパではかなり早い時期から共同体間で大きな争い（戦争）があったのだろうか。私はそのように思いたくないのだが、
図をよく見てみると、数人に矢が当たっているように見える。

日本の場合は時間を遡りながら見てみよう。

図１０は「日本絵巻物全集１８巻」（角川書店）の解説をしている梅津次郎によると14世紀松野作品とされ、広島の浅野家に伝わる絵巻物で、日々武術の鍛錬に励む男性を描いている。馬上で使用しいる騎射の図なのだが、他国の弓と比べると長くて、弓の中心よりも下に矢を番えている。

図１１　平治物語

図１１は「平治物語」の「義朝に東国行きを諫言する正清の図」。１３世紀の作とされていて、「平治の乱」は１２世紀中頃の事件。図１０，図１１はいずれにしても弓矢を短下長上の構え方にしている。

　それではもっと時代を遡ればどうなのだろうか。

図１２　清水寺縁起絵巻

図１２は９世紀初めの坂上田村麻呂が征夷大将軍として蝦夷討伐に行った時の絵なのだが、この絵の載っている「清水寺縁起絵巻」（続続日本絵巻大成第五巻　伝記。縁起篇：中央公論社）の榊原悟の解説を読むと、絵と文章は別々の人の手による物で、絵の方は１５１７年～２０年に描かれたものらしい。つまり実際にあった事柄から７０年も経ってから描かれた絵なので、どこまで正確なのかと疑ってしまう。現在書店で売っている戦国時代を解説した本でも、武士がゆっみの中央で矢を番えている絵を見かけることがある。文章は専門家が書いているのだが、絵は歴史

の専門家ではなく、イラストレーターが描いているのでそういうことが起こる。もっとも専門家にしても自分の得意分野以外ではまったく知識が無いとか、興味が無い人が多いということなので、文章は正しくても絵は間違っているということが起こるようだ。

図１３も坂上田村麻呂の蝦夷討伐の絵なのだが、左側の蝦夷の持つ弓を見て欲しい、彎弓と半彎弓の両方が見えるのだが、両方とも短下長上のように見える。これはどのように考えればいいのだろうか。日本列島では米・稲とは別に、馬が入ってきた頃に騎馬民族の彎弓が入ってきて、馬を持ち込んだ人たちは東北で独自な共同体を形成し、大和朝廷にまつろわず、朝廷軍と激しく戦っていたということなんだろうか。

図１４　蒙古襲来絵詞

図１４は鎌倉時代に日本へ攻め入ってきた元軍を描いたものなのだが、なんとなく図１３の蝦夷軍の弓と似ている気がする。図１４の製作年代は１２９３年ということなので、図１３よりも早い年代に製作されたということだから、ひょっとすると図１３を描いた土佐光信はこの元軍（蒙古軍）を参考にして、図１３の蝦夷軍を描いたのかもしれない。

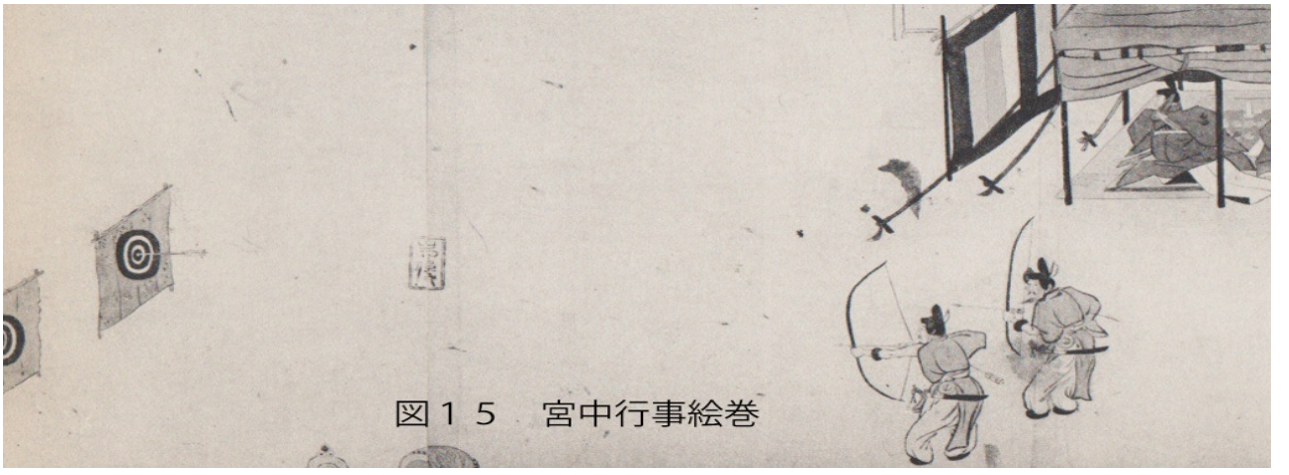


図１５　宮中行事絵巻

図１５は１２世紀後半に製作された「宮中縁起絵巻」。すでに半彎弓で短下長上の弓を使っている。

写真２は４世紀頃に造られた奈良県メスリ山古墳（註２）から出土した銅製弭とその説明図。弭をつけた位置は弓の中心よりも下、つまり４世頃の奈良地方に住んでいた有力豪族（大王？）も短下長上の弓を使っていたことになる。

　さらに時間を遡って見よう。

図１６　袈裟襷文堂銅鐸（表）

図１７　袈裟襷文堂銅鐸（裏）

弥生時代には銅鐸という形ではっきりと弓矢が描かれているのでわかりやすい。図１６も図１７も短下長上の弓を使っている。

写真３は奈良県桜井市から発掘された紀元前１０００年から紀元前４９９年前頃の弓。下ぶくれの形から見て弓の中心よりも下に矢を番えた方がより強い発射力が出ただろう。つまり短下長上の弓と言えるだろう。ただ、この弓は縄文時代を代表する弓とはいえない。他の地域から発掘された弓にはほぼ上下対称的な形のものがあるので、縄文時代に日本列島に住んでいた一体全てが短下長上の弓を使っていたとは言えない。しかし、直接現代日本人に繋がるとされている弥生時代の銅鐸文化圏の人たちは、間違いなく短下長上の弓を使っていたと言えるだろう。さらに３世紀中頃とされる邪馬台国では、「魏志倭人伝」によると倭国の風俗として「好んで魚や鰒を捕らえ、水の深い浅いなく皆沈没して之を取る」（佐原真「魏志倭人伝での考古学」岩波書店）と漁が盛んだった記述され、その倭人達が使っていた弓が「木の弓は下を短く上を長くす」（佐原真）と短下長上だとしている。４世紀初めの大和地方に住んでいた首長クラスの豪族も短下長上の弓を使っていた。もし、大和朝廷を造った人たちが朝鮮半島からやって来た騎馬民族ならば、彼らの主要な武器である弓は短い弓で、弓の中央で矢を番えていたはずなのに、資料に残っている弓は騎馬民族の弓よりも長くて短下長上の射法なのだ。また、征服者が騎馬民族でなくても朝鮮半島から押し寄せてきたのなら、当時の朝鮮半島では長い短下長上の弓を使っていたはずなのだが、朝鮮半島での発掘が進んでいないのか、日韓の学者がそうしたことに興味がないのか、当時の半島の豪族・有力者と大和朝廷の主要な貴族とが同じ弓を使っていたという研究発表を私はきいたことがない。そして現在は韓国で国技とされている弓は彎弓で、弓の中央に矢を番えているのに、日本では半彎弓の長弓で短下長上の弓が国技の弓なのだ。日本の近くのモンゴルや中

央アジアのトルキスタンの騎馬民族も彎弓だ。朝鮮半島の人たちが日本を征服して山と盆地に住みついた後、突然、長弓の半彎弓を短下長上で使い出したと考えるのは無理がありすぎる。

さて、もう一度歴史を遡って縄文時代の弓について資料を探してみよう。「縄文美術館」（写真：小川忠博、監修：小野正文・堤隆、平凡社）に載っている、縄文時代の石に刻まれた弓矢と土器に描かれた弓矢の写真を計測してみると、群馬県矢瀬遺跡から出土の石に刻まれた弓矢では、矢を番えている位置は上下がほぼ同じなのだが、青森県和台遺跡（縄文中期から後期前葉）出土の土器では、上の方が長く短下長上になっている。新潟県青田遺跡から出土した木の弓は、アフリカと同じ直弓だが、弓のどの位置に矢を番えたかはわからない。韮崎遺跡出土の土器や和台遺跡出土の土器に描かれた弓が短下長上なのは、土器に弓矢を描く時に偶然にそうなったのか、それとも正確に描写してそうなったのかよくわからない。学者によっては縄文時代の弓は上下が同じだとしているが、写真３を見れば、縄文時代は短下長上の弓を使っていた地域や共同体があったと言えるのではないだろうか。青田遺跡出土の弓の材料はイヌガヤで、縄文時代にはすでに桜の皮を弓に巻いたり、漆を塗って祀りように使用したりする飾り矢も各地で出土（「縄文美術」平凡社）しているということで、弓矢が縄文人の日々の生活にとってとても大事なものであったことがわかる。現在も、大陸や朝鮮半島からやって来た稲や水稲耕作技術を持った人たちが縄文人を日本列島から追い出して、列島の支配者になったという単純な征服史観を信じている日本の知識人は多いのだが、こうした弓から見た日本人のルーツを考えるともう一度考え直さねばならないと思う。さらにＤＮＡ研究でも現在日本列島に住んでいる人たちは、アイヌ人も沖縄（琉球）本島の人も同じ縄文人の遺伝子を引き継いでいるという研究発表や、現在も日本列島に残る土着の信仰などからも、アイヌ人も沖縄（琉球）本島の人も、列島人も縄文時代に日本列島に住んでいた人たちからからの基本的な意識・文化を引き嗣いでいるといえるだろう。（註３）ただ、彼らは天皇制や幕藩体制の外側にいた独自な文化を持った人たちだった。

それでは天皇制の外側にいたアイヌ人についてもう少し詳しく弓矢から考察してみよう。まず、清水寺縁起絵巻にも描かれている蝦夷のことから。

蝦夷は（えみし）は蝦夷（えぞ）と同じ漢字をあてているので、同じ人たちだと思っている人が多い。確かに金田一京助によると東北の地名にはアイヌ語が原型になっているような地名がたくさんある。ただし、崎谷満によれば、アイヌの人たちは大きく分けて、道北、道南、道東、道央の４つのグループに分かれていて、本州の青森や上越地方まで居住していたのは道南のグループで、このグループが後のアイヌ人の母胎になったかもしれないという。しかし道南のグループは後に擦文文化を持った人たちと取って代わられ、オホーツク文化と融合して１３世紀にアイヌ文化が確立されただろうということだ。つまり、青森や上越にいた蝦夷（えみし）はそのままアイヌ人になったわけではない。鈴木拓也「蝦夷と東北戦争」（吉川弘文館）では、蝦夷が得意としたのは、弓馬を用いた戦いであった。」とし、更に『征夷における実際の戦闘でも、主に用いられたのは弓であった。延暦八年（７８９年）の桓武朝第一次征討で、征夷軍は阿弖流為（あてるい）が率いる蝦夷軍に大敗を喫するが、征夷軍の負傷者２４５人は、全員が矢に当たって負傷していた。（「続日本紀」延暦八年六月甲戌条）。東北北部から北海道にかけての末期古墳には

、蕨手刀といわれる刀が副葬されることが多く、数人同士の戦いでは刀剣が用いられた例もあるが（「日本三大実録」元慶二年〈８７８年〉六月七日条）、集団間における主要な武器は弓矢であり、刀剣は補助的な武器であった。』としている。またさらに、『馬飼は蝦夷の主要な生業であり、これと弓矢の日常的な使用が結びついて、高い戦闘能力を身につけていた。』としている。もし、この頃大和朝廷と戦った蝦夷がアイヌ人の直接の祖先であるならば、アイヌ人は馬の飼育と扱いに長けていたことになる。しかし、北海道の蝦夷（えぞ）地に馬がやって来たのは１８世紀になってからと随分後のことになる。東北とアイヌ人の関わりについて瀬川拓郎「アイヌの世界」（講談社）で、４世紀頃、続縄文人が東北北部に進出したが、５世紀以降の古墳集団の進出のなかで、６世紀には東北北部からほとんど撤退してしまい、アイヌが東北北部に広く展開することはかったとしている。そうすると８世紀に桓武朝と戦った阿弖流為の蝦夷軍（えみし）はアイヌ人と直接的な関係がないことになり、馬の飼育とも矛盾がなくなる。そこで弓矢からみたアイヌはどうなるのかみてみよう。

図１８　夷酋列像シモテ

図１９夷酋列像ニシコマケ

「夷酋列像」（北海道博物館編集）では、アイヌ人にかかわる絵が多く載せられている。解説を読むと「松前藩士・蠣崎波響が１７９０年に手がけた１２人のアイヌ人」が描かれているということなので弓に関する絵を見てみよう。図１８と図１９の２枚の絵とも、アイヌ人が持っている弓は和弓と比べてかなり短い。これは毒矢を使っているからで、彼らはトリカブトなどの毒を使って陸の獲物を獲っていた。アフリカでもそうだが、毒矢を使う人たちの弓は小さい（短い）。弓矢や弦の張力ではなく毒の力で獲物を仕留めているからだ。東南アジアの人たちが使う毒を使った仕掛け矢も同じ事が言える。後で、アイヌ人の食生活を紹介するが、アイヌ人は魚、特に鮭を非常にたくさん食べる。漁は網や釣り竿、梁のような罠などを使っている。

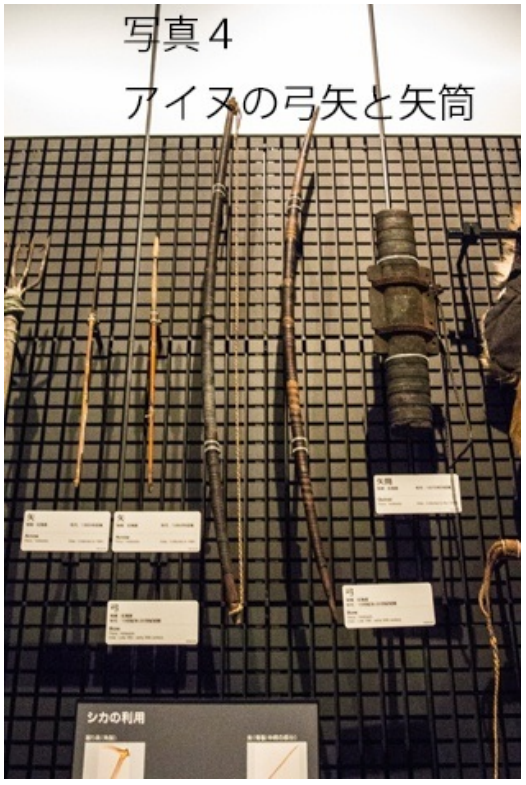


写真４
アイヌの弓矢と矢筒

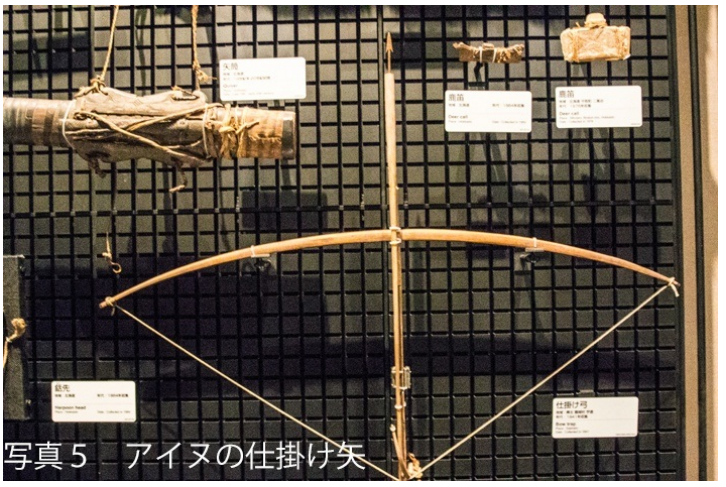


写真５　アイヌの仕掛け矢

写真４はアイヌの弓と矢と矢筒。北海道で１９世紀から２０世紀に収集されたもの。１８世紀末の夷酋列像の絵の弓とほとんどかわらない。写真５の仕掛け矢も大変小さく短い。やはり毒を使用していたのだろう。これらは森や林の中では大変扱いやすく有効な狩猟用武器だといえる。銅鐸文化の人たちや大和朝廷の人たちとはかなり異なった弓矢を使っていたということだ。

　ここでもう一度弓が人間にとってどういう物なのか考えてみよう。弓は狩猟用の獲物である魚や動物や鳥などを撮るために作られた道具だった。それがいつの頃からか人間同士の戦いに用いられるようになった。戦争の武器となった。狩猟のためだけでなく、戦争の目的のために様々な改良がなされてきた。家畜を作り出し飼育するようになって、動物を狩る必要が薄らいだ時に、狩猟用から戦争用に大きく変換された可能性がある。騎馬による戦争が弓を小さくし、小さくても大きな力を発揮する彎弓が作られた。彎弓は弓の中央に矢を番えるほうが扱いやすく正確に射ることができる。それでは現在でも短下長上の弓を使用している日本と、ブラジルのアマゾン川流域に住む人たちの生業はどうなのだろうか。毎日新聞２０１６年７月８日版では、ブラジルの先住民がアーチェリーでオリンピックに出るというニュースが載っていてた。彼は子どもの頃から弓で魚を捕っていたので、アーチェリーはすぐに上達したという。「弓道」（松尾牧則）ではブラジルのアマゾン川流域に住む人が弓を構えている写真が載っているが、写真をコピーして計測してみると、短下長上であることがわかる。さらにその弓はかなり長い。密林や山間部で陸上の獲物を獲るには長すぎるように思える。

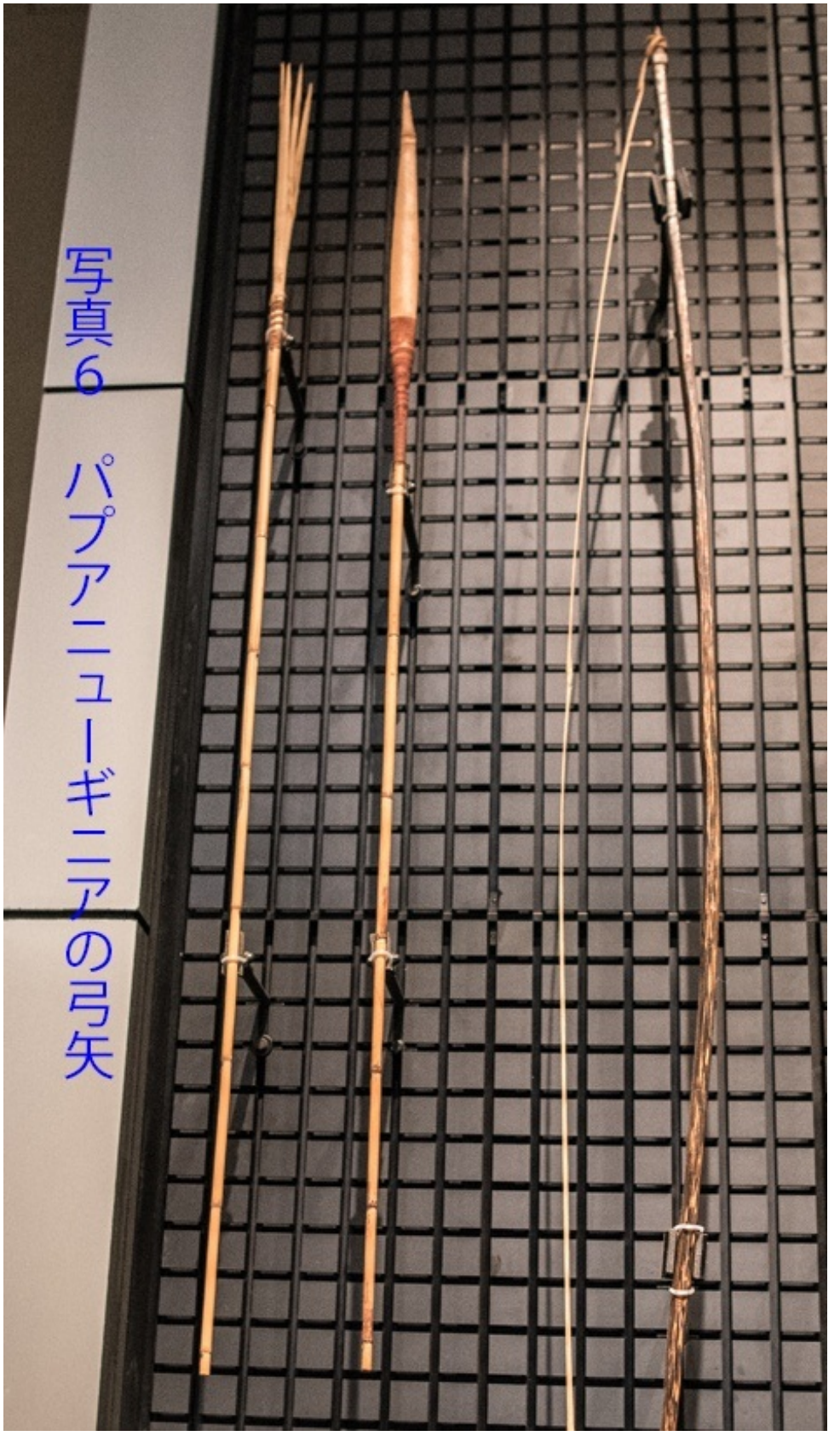


写真６はパプアニューギニアの弓矢だが、騎馬民族の人たちが使う弓矢と比べてかなり長い。さらに矢の先端が４つに分かれていることから魚を捕るための弓矢だとわかる。弓矢は基本的には生業に１番有効な形をしているものだと思える。

　この地域には戦闘用の棍棒がたくさん種類がある。ひょっとしてこの地域の主な戦闘は棍棒による肉弾戦だったのかもしれない。調べてみる必要がある。

　ここで少し日本の近隣諸国の弓を見てみよう。

「特別展　始皇帝と大兵馬俑」図録（ＮＨＫプロモーション、朝日新聞社発行）から弓に関する物を見てみると「弩」が載っている。始皇帝が死んだのは紀元前２１０であり、秦が滅んだのは紀元前２０６年だから、始皇帝の墓の兵馬俑はその頃の兵士の姿を現しているわけで、兵器も秦の時代の物と考えられる。図録の説明では弩は弓よりも強力な飛び道具となっている。しかし、「弓に仕込んだ板バネで矢を放つため、たおきには両足で横弓を踏み込み、身体全体を使って弦を引くこともあった」（図録）ということで、扱い方は難しく手間がかかったように思える。接近戦や乱戦にはむいていないだろう。戦いの開始直後の距離があいている状況に適した武器だろう。「三国演義兵器図録」（伯仲　古月編集・湖南美術出版社）では、「両軍遭遇、弓弩在先」と書いてあるように、中国大陸の古代の戦いは先ず弓や弩で矢を射ちあい、それから刀や槍などの接近戦だったようだ。日本にも大陸の弩が弥生時代には入ってきたようだが、あまり使用されなかったようだ。日本人のどういう生活様式や意識（美意識・価値観・宗教・効率など）と相容れなかったのだろうか。また、戦国時代の戦いでも、双方とも先ず弓で射ることから戦闘が始まったようだ。映画やＴＶなどの戦闘シーンは史実とは異なって演出されたものが多いようだ。戦国時代に日本にいた宣教師ルイス・フロイスの記録では竹田の騎馬軍団は馬から降りて戦っていたと書かれているなど、私たち一般人が常識のように思っている歴史が、江戸時代の歌舞伎や明治以降のお芝居や映画などで作り出されたものであることが多いので、注意して調べていかなけらばならない。

写真７　リス族の弩とヌー族の矢筒と矢

写真７は雲南省のリス族が使用している弩と、ヌー族が使用している弩の矢筒と矢。どちらも１

９８０年に製作されたもの。秦の弩と比べてかなりコンパクトで扱いやすそう。彼らが使っている仕掛け弓とその大きさが変わらないので、それほど飛距離があるとは思えない。秦の弩が平原での戦闘用なら、リス族らの弩は森や山間部で獲物を獲るのに適しているようだ。

　こうしてみてみると、日本では中国大陸や朝鮮半島と異なって、魚を捕るのに適した弓矢を使い続けているのには生業と関係がありそうな気がする。松尾牧則が「弓道」で「縄文後期から弥生時代には、すでに短下長上でやや長く、補強や装飾をされた弓を使用していたと考えることができる」と書いているように、弓矢という日常的にも非日常的にも非常に重要な道具・武器の基本形がすでに縄文時代後期から始まって現在まで続いているといえるだろう。いいかえれば、日本人的な基本的な生活意識や価値観などが縄文後期から始まり続いているといえるだろう。

　さて、
これから弓と生業が深い関わりがあるという観点から、昔の人たちがどのような物を食べていたのか調べてみよう。
　私が子どもの頃は、人間はマンモスを追って北へ進出していったという認識が一般的であった。原始時代は、園山俊二のコミック「ギャートルズ」や「はじめ人間ゴン」のように生ばかり食べていたと思われていた。つまり原始人は肉食で文明人は野菜も食べるという認識だった。しかし、先ず近・現代の食生活をみてみると、「生業からみた北方民族の文化」（渡部裕解説・北海道立北方民族博物館）のするに所収されている岡田淳子「生業からみた北方民族文化」から引用すると、「狩猟は高緯度地帯や中・大型の草食獣の生息密度の高いサバンナなどで活発に行われてきたが、熱帯から温帯まで食料の獲得全体に占める狩猟の実際の割合はあまり大きくない。」ということで、私たちが子どの頃に抱いていた、密林に住む人＝原始人＝肉食が中心というイメージは間違っていた。山極寿一「暴力はどこからきたか」（ＮＨＫ出版）では「熱帯地方の狩猟採集民は森林やサバンナを問わず、全食物の２０～３０％を肉が占める。この比率は高緯度地方になるにしたがって高くなり、極北の地に住むイヌイットの人はほとんど肉や魚などの動物性食物に頼って暮らしている。つまり人類は、寒冷乾燥の季節が長い環境へ移住するにしたがい肉食の度合いを強め、肉食に適した消化管をもつようになったのである。」と書いているように、人類は１８～１９世紀の欧米人が考えたような原始人＝狩猟民＝肉食中心の食生活というのではなく、穀物や食用になる植物が育ちにくい寒冷地に移住したことに適応するために肉食の度合いが増加したということだ。つまり、食用になる植物がないので、人間にとって食用にならない植物を食べて生育する草食動物の乳や肉を食べることによって、その過酷な環境を生き延びてきたということだ。もっと時間を遡ってみると、類人猿で狩りをして肉食なのはチンパンジーぐらいなのだがそのチンパンジーは全食事の５％ほどが狩りによる肉食である。他のボノボやゴリラやオランウータンなどの類人猿は果物や植物の葉を食べて肉食はしない。話はそれるが、チンパンジーでも狩りをするのはオスだけで、肉を分配するのもオスだけ。メスは自分の子どもに植物性の食べ物を与えることはあっても、肉はめったに与えない。（山極寿一「暴力はどこからきたか」）この肉に対する感情は人間にも引き継がれているのか、「動物の肉が食料価値が高いことは、アフリカの狩猟採集民の調査からも明らかになってきている。」（岡田淳子「生業から見た北方民族文化」）ということで、人間の心の闇を見るようで面白い。人間と肉の関係を考えると、『非暴力の思想は、「肉の恐ろしさ」に由来している。そう考えると、「暴力の思想は肉食の思想である。ビフテキの味の中にどこか戦争の匂いがする』（寺山修司「さかさま世界史」）を思い浮かべる。肉食と暴力については以前、ラットを使ったインド人のグループの研究が発表されたが、その内容は現在は否定されている。しかし、霊長類では食べ物と群れの形態との関係について研究がすすめられているように、食べ物はそれを食べる動物の様々な生活様式に関係している。
　菊池俊彦「北東アジアの歴史と文化」（北海道大学出版会）によると、約５０万年前にヨーロ

ッパへ進出した人類集団（私たちの現世人類ではない一註・著者）は各地で出土しているハンドアックスからアシューリン石器群を装備し、ショーニンゲン遺跡出土した木製槍の存在から考慮すると、動物性蛋白質を獲得するために、一部では狩猟行動を開始していたと推定されている。それではアフリカにいた頃の現生人類はどうだったであろうか。これからの研究が待たれる。

さて、北海道に住むアイヌ人の食料はどうだろうか。「アイヌの主要な食料は他の北太平洋沿岸諸民族と同様に魚類であったと考えられる。とくにサケへの依存は大きく、大量に捕獲して乾燥保存するとともに、交易品にもあてていた。」（解説渡部裕「生業からみた北方民族の文化」）というように、魚がたいへん重要な食料であった。これは狩猟という観点からは、陸上の動物を狩るよりもはるかに効率がよい。陸上動物は弓矢や槍を発明したからといって、そう簡単に手にできるわけではない。身体が大きく強力な牙や爪があり、集団で狩りをするライオンでさえ、狩りの成功率はかなり低い。特にマンモスのような大きな動物は、一度の狩りで多くの人を食べさせることができるという机上の考えで、アフリカから出た初期の現世人類はマンモスを追って世界中に拡散したという説が一時期有力であったが、狩りを成功させるにはとても大きな労力がいる。石器の弓や槍では時間もかかるし成功率も低かっただろう。実際に現代行われている象狩りの様子を見てみると、「わたしは、アフリカの熱帯雨林に位置するカメルーン南東部で、定住生活を送りながら季節に応じて狩猟採集をおこなうバカ・ピグミーの人びとと、乾季のキャンプ生活をしていた。彼らは食用のためにゾウを狩る。狩猟者は上着を脱いで、それぞれの銃筒部分に弾丸代わりの１メートル弱の槍を差し込むと追跡を開始した。やがて、バイとよばれる見晴らしのよい湿地に出ると、前方１００メートルほど先に数頭の象の群れを確認した。私は皆に促されて、近くの樹上に待避する。狩猟者は、ゾウに気づかれないように５～１０メートルまで接近するために、風下から草木に身を潜めつつ、細心の注意を払いながら近づいていった。やがて、銃声とともにゾウの雄叫びが響いたが、この時の狩猟は失敗に終わった。発砲の勢いで槍は飛ばしたものの、分厚い皮膚に跳ね返されてあえなく逃げられてしまったのだ。」（『月刊みんぱく』編集部編「食べ垂れる生きものたち　世界の民族と食文化４８」丸善出版）　巨大なゾウを狩ることはとても困難なことなのだ。現代人が鉄の鏃をつけた槍と鉄砲の組み合わせでも失敗することがある。マンモスが絶滅したのは人類が食べ尽くしたからだろいう説もあったが、ほとんど机上の空論としかいいようがない。なぜアフリカ象やアジアゾウは生き残っているのだろうか。

それに比べると魚は網や梁や荃などなどの仕掛けで一度にたくさんの魚が捕れる。子どもでも捕ることができる。サケのように特定の時期に川を群れをなして遡上してくる魚は寒い地域の人にとってとても重要な食べ物なのだ。崎谷満「新日本人の起源」では縄文時代初期には鏃と弓矢が発明されていたと共に、石錘を利用した漁網や釣り針などの利用や、貝類の採集を行っていた。また雑穀以外の植物の簡単な栽培も行われていたことによって、飛躍的に食料事情が改善され人口増加に繋がったが、特に魚介類のウエートが大きかったということで、魚介類は縄文人だけでなく、出アフリカの人類全体の食料としてかなり早い段階から重要な食料であったと思える。槍で陸上の動物を狩る知識・知恵があるなら、浅瀬の海や川で魚を銛で突く知識・知恵もあったはずだ。さらに、栄養学的にも魚は人間にとってとても大切な食料なのだ。「ビタミンＤの働きがカルシウムの代謝や平衡に限らない、それどころか脳や神経、血管なども含む全身の器官に及

ぶことがわかったのです。」（斎藤嘉美「ビタミンＤは長寿ホルモン」株式会社ペガサス）というビタミンＤを食べ物でみれば、「ビタミンＤは脂溶性であるため、脂に富んだ魚や魚卵・卵黄などに多く含まれています。（中略）ビタミンＤは脂溶性であるものの、なぜか肉類にはほとんど含まれていません。卵黄やピータン、ウズラの卵などを除けばカモにやや多めに含まれている」（斎藤嘉美「ビタミンＤは長寿ホルモン」）というように、人間には魚が非常に重要な食べ物ということだ。また、小麦やトウモロコシを主食にする人たちには必須アミノ酸のリジンが不足するので、魚や豆や乳や肉が必要となる。ヴェジタリアンが多いインド人が豆を多く食べ、チャイという牛乳で煮込んだお茶を好むのも、栄養学的な根拠がある。なお、米には必須アミノ酸が全て含まれていて、穀類としてはバランスのいい食料といえる。

こうしてみてくると、我々現生人類は「肉にて生きるにあらず」ということで、チンパンジーと共通した祖先から別れた時から少しは狩りによる肉食の性質を持っていたかもしれないが、本来は植物が主食だったろうし、哺乳類や鳥などの肉を食べなくても生きていける生物だといえる。それではなぜ、初期的な現生人類が肉食中心だったというイメージが定着したのだろうか。その認識のもとになったのは、田中真砂子「機能主義人類学　　文化人類学１５の理論」（中央公論社）から引用すると、モーガンのイロクォイ族の調査を除けば、これまでの人類学の大物学者たちは自ら書斎を離れること亡く、宣教師や植民地の役人や商人から得られた資料をもとに、比較をしたり、壮大な評論を組み立てたりしていた。（中略）要するに、人類の社会は全人類に共通の一般法則に従って、より原始的な形からより高度な、もしくはより複雑な甲子へと進化する。」という認識や、正確なフィールドワークに基づかない知識、例えば北米の一部の先住民が肉中心の生活だからということで、単純に、原始人＝肉食中心という認識になった。狩猟採集＝動物的＝原始的＝進化の下層、農耕＝人間的＝文明的＝進化の上層という図式が確立された。これは習俗に関しても同じ発想で、原始人＝乱婚、文明人＝一夫一妻制という図式になった。しかし１９世紀末からフィールドワークが盛んになるとこうした認識・理論がいかにデタラメであったのかわかるようになった。

『たとえばモーガンは原始乱婚→集団結婚→一夫一妻制というような家族・婚姻制度の「発展段階」を考え、これを生業や所有の形態と関連させながら人類社会の進化に関する壮大な一系的スキーム（体系）を提示したのであった。しかしその後、いわゆる未開社会の実地調査が進むにつれて、乱婚生などというものは存在しないし、過去にそのようなものがあったと推論する根拠もないこと、モーガンのスキームによれば最も進んだ婚姻の形であるはずの一夫一妻制が最も原始的であらうと考えられる採集狩猟社会に広く見られることなどがあきらかになり、人類のすべての社会が一系的に同一の家庭を経て進化するという理論的枠組みそのものが疑われるようになった。』（田中真砂子「機能主義人類学」）

私たちが子どもの頃に抱いていた原始人というイメージそのものが根本的に疑われるようになった。私が古代人の食事の話なのにこうした余計なことまで書くのは、現代でも人類の社会を一系的に段階論的に捉えて、西欧文明がもっとも進化した文明であると（日本もその仲間）と考えている人がマスコミに頻繁に登場する学者・政治家・評論家など右左に関係なく多くいるということと、自分自身が若い頃にそうした認識・理論に囚われていたという痛苦な反省からなのだ。

学生時代の私が共産主義のテキストとして１番初めに読んだエンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」（ここに引用しているのは新日本出版社のもの）の第一版序文では「カール・マルクスこそ、モーガンの研究成果を、彼の一ある限度内ではわれわれのといってよい一唯物論的な歴史研究と関連させて叙述し、そうすることによってはじめてモーガンの研究成果の全意義を明らかにするつもりでいた人にならなかった。」と書いているように、マルクスとエンゲルスの二人がきまじめに一生懸命読んだ世界各地の先住民・共同体にかんする膨大な書籍から導き出された理論は、「なにしろモーガンは、モーガンなりにに、アメリカで、マルクスが４０年前に発見した唯物史観をあらためて発見していたのであり、未開と文明を比較するにあたって、この史観にみちびかれて、主要な点でマルクスと同じ結論に達していたのだから」（エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」新日本出版社）という１９世紀の欧米の誤った認識・文明観に基づいたものであった。このマルクス・エンゲルスの理論や原始共産制社会のイメージは世界中の若者達に影響を与え、で原始共産制の共同体を実現するのだと世界各地で（日本でも）、山や野原に農耕を主な生業とした、一夫一妻制を否定した乱婚による共同体を作った若者達がいたが、当然のごとくそれらは皆すぐに解体・消滅した。未だかって成功した例はない。私は自然人類学的な視点から「原始共産制社会なんて現実的にありえない。机上の空論だ。」と言ったら、「原始共産制社会を否定することは、マルクス主義を否定することだぞ。」とマルクス・エンゲルスの著作をとても真面目に一生懸命に読んでいた友人は激しく私を怒鳴りつけた。当時の私は左翼運動の周辺にいて、彼のマルクス主義の知識の豊富さは、私など彼の足下にも及ばないということを知っていたが、それでも「未来の共産主義社会に希望は持てても、原始共産制社会は絶対に認められない。」と言い切っていた。そんな論争相手ももうこの世にいない。彼が生きていたら現在はどのような認識に達していただろうか。

日本人と食べ物

　私たち日本列島にやって来た人びとはどんな食べ物を食べていただろうか。石毛直道「日本の食文化史」（岩波書店）によると、「縄文時代の遺跡の多くは貝塚である。そのことからもわかるように、食用の海産資源の利用もさかんであり、沿岸の魚類も食べられていたし、採集しやすく、量的にも安定した収量が見込める貝類も日常的に食べられていた。」「世界の狩猟採集文化のなかでも、縄文文化は海での漁労活動に食料を依存する比重が大きい。縄文時代の貝塚からもマグロやカツオなどの外洋魚の骨が発見され、船で外洋に進出していたことがわかる。（中略）関東地方には貝塚が多く、全国の６０％が集中している。この遠浅の入り江は干満の差がおおきく、塩のひいたときには、貝類の採集が容易であった。３５４種類の貝類が貝塚から発見されている。」ということや、縄文人の骨から食べ物を探る研究でも、縄文人は海棲の生物を多く食べていたという結果がでている。さらに石毛直道「日本の食文化史」では「一般に狩猟や漁業に依存する食生活をおくる民族には虫歯が少ないことが知られている。縄文時代の遺跡から発見される人骨を検査すると、虫歯をもつ人がおおかったことが判明した。そのことは、縄文時代の人びとが炭水化物食品を大量に摂取していたことをしめしている。その炭水化物の主な食料は、先に述べたように、ドングリなどの堅果類であったと考えられる。」ということで、日本列島に住みついた人たちは、ただ野山を駆けまわって食料を調達していたのではなく、当時よりも飛躍的に平野部が増えた現在でも、海岸線の長さでは世界第６位の日本の地形を活かした食生活・生業を行っていたのだ。

　縄文時代には東日本に多くの人が住んでいた。人口密度では東高西低であった。そうした東北では『定住化を進めた社会は、集落の付近で動物質、植物質双方の食材を手に入れることを余儀なくされた。現代に住むわたしたちはこれらを別のもの、つまり違う場所から供給される別の物と考えているが、歴史的にみれば両者は同じ場所、ないしはきわめて近接した場所で作られ、あるいは採られ、調理されてきたのである。（中略）そしてこの関係は、その土地に応じてさまざまなかたちをとってきた。（中略）東北地方の北部が「米と魚」のかたちを持つようになったのは近世以降であり、それ以前は「雑穀と魚」の地域であった。』（佐藤洋一郎「食の人類史」中央公論社）。粟や稗・黍といった雑穀の簡単な栽培だけでなく堅果類も早くから栽培されていた可能性がある。そうした食料がかなり豊富だったから、陸上の動物をあまり食べる必要がなかったのかもしれないし、米・稲作が西から入ってきた時も急いで米・稲作をとりいれる必要がなかったのかもしれない。「ドングリが主要な食物として、豊かで安定した社会をつくりあげていた民族例としてカルフォルニアの先住民があげられる。彼らはトウモロコシを栽培する周辺の農業地帯と交渉があり、農業をうけいれる条件がととのっていたにもかかわらず、ドングリに恵まれたために狩猟採集の生活を捨てられなかったのである。彼らは部族社会をつくりあげ、部族によっては貴族階級が出現するほどの成熟をとげていた。」（石毛直道「日本の食文化」）

　縄文時代の環境については、「約２万年前、ヴォルム氷期（最終氷期）晩期には、現在よりも７度ほど気温が低く、大型の動物の多くがこの時代に絶滅している。群れをなして移動する大型

獣を食料とした後期石器時代の人びとは、動物を追い、頻繁移動を行っていた。《中略》約１万５０００年前になると氷河期も終わりに近づき、急激な温暖化が始まった。これにより食性が大きく変化し、草原は減少し、広葉樹の森林が拡大した。《中略》日本列島の海と森林・河川は、四季折々にさまざまな食料を提供し、人びとはその季節に応じて採集・狩猟・漁撈を行うことで、豊富な食料を手にすることができた。《中略》食糧事情が安定すると、人びとは獲物を追い求めて遊動する生活を止め、定住生活を始めることになる。」（岡村道雄「別冊宝島２３３７号素晴らしい日本文化の起源　岡村道雄が案内する縄文の世界」宝島社）

岡村道雄は石毛直道とことなり、どんぐりはアク抜きする必要があるが、クリならアクを含まないので生食が可能であり、縄文人の主要な食べ物になっていたと説く。私も岡村のクリ主食説に賛成する。日本人にとってクリは現在も正月のおせち料理にかかせない食材であり、木材としても堅くて腐りにくいことから、「三内丸山遺跡の大型の堀立柱建物の構造材として用いられていたりして」（岡村道雄「縄文の世界」）食材としてだけでなく建材としても有用なのだ。そうしたことからか、『三内丸山遺跡から大量に出たクリの花粉の研究などから、集落の周辺に「クリ園」を仕立てていた。』（岡村道雄「縄文の世界」）

ドングリにしろクリにしろ縄文人にとって堅果類は重要な食料であったことは間違いない。それでは陸上の動物はどうであっただろうか。やはり貝塚から発掘される骨から推測できる。「縄文時代の」遺跡からは約７０種類の骨が発見されているが主要な大型の狩猟動物はシカ、イノシシである。多くの遺跡で発見される９０％が、この２種で占められている。シカ、イノシシを猟犬によって追い出しで狩猟することは、１万年以上前から現在にいたるまで受け継がれてきたのである。狩人の伴侶であった犬はたいせつにあつかわれ、埋葬された事例も多く発見されている。ただし、本格的に農業を開始した弥生時代になると、切断されたイヌの骨が遺跡からよく発見され、イヌを食用に供するようになったことがわかる。」（ミャンマー）石毛直道「日本の食文化」）弥生時代には稲作とともにイヌを食べる風俗も入ってきたようだ。現代ではイヌを食べるのは中国と韓国が有名で、他にもヴェトナムやポリネシアで食べられているので、そうした人たちと外来型弥生人とは遺伝子的な繋がりがあるのかもしれない。ただ、話は少し脱線するが、中国といってもその土地が広大で、住んでいる人たちも様々で、歴史によってその領土の範囲も民族も大きく異なることは常に頭にいれておかねばならない。日本人の常識として「中国の農耕文明は、黄河中・下流行きと長江ではぐくまれた。漢族は、その文明を担ってきた最大の民族集団であり、その名称は漢五王朝（２０６Ｂ.Ｃ－２２０Ａ.Ｄ）に由来する。１３億人といわれる中国の人口の９割以上を占め、地球上の人間の５人に１人が漢族である。言語や習慣の地域差は大きいが、祖先祭祀、婚礼、年中行事の規定にある知識体系、宇宙観、生育感染父系制などは共通している。」（国立民族学博物館の展示館にあるパネル）といった認識があるのだが、これも遊牧民からみればとんでもないことになる。現在の内モンゴルで生まれ育ち、日本の国立民族学博物館などで文化人類学の研究をして、現在静岡大学教授である楊海英は、『日本人は、中国式の歴代王朝を暗記し、夷狄を撃つため辺境に赴任する兵士の漢詩を学ぶ。しかし、じつは夏（中国初期の王朝一註・夢野）から現在の中国は一気通貫に歴代王朝があったかのような史観は間違っている。北京から世界を観るのではなくユーラシアから中国大陸をみると世界は違って見えて

くる。《中略》「漢民族」という「民族」が古代から居て、黄河を中心に文明を周辺部にひろげていった、と現在の中国でも日本でも信じられている。しかし、考古学的、言語学的な証拠によれば、そもそも「漢民族」とよべるような人びとはいなかった。《中略》紀元前十世紀の中原に、殷王朝が栄えていたのと同じ時期、シベリアやモンゴルなどのユーラシア東部には、青銅器を鋳造する冶金文明が生まれていた。ユーラシアの青銅器文明は紀元前三千年まで遡ることができる。さらに遡った草原の遺跡に、古代遊牧文明が残した謎の鹿石がある。』（楊海英「逆転の大中国史」文藝春秋）。学者によっては漢字の使用が文化の一貫性とする人もいるが、やはり「１２６９年、モンゴルはバクバ文字を国字に制定し、ウイグル文字との併用をみとめた。しかし、漢字を国字にすることはえらばなかった。」（楊海英「逆転の大中国史」）

私たちのすぐ隣の中国の歴史についても、視点をユーラシア全体に写すと、まったく違った世界が見えてくる。これは朝鮮半島についても同じことがいえるだろう。

日本列島には縄文時代にはシカやクマよりも大型の哺乳類がいなかったようだ。他の地域のような牛や水牛や馬のような大型の草食動物がいなかったためか、大型の肉食獣、ジャガーや虎といったネコ科の大型獣がいなくて、本州にツキノワグマ、北海道にヒグマがいるだけで、狼もいたがクマほど大きくない。日本列島には平野部が少なかったということが原因なのか、この日本列島では人類が住みついてから明治になって西欧文化を輸入するまで、大型の哺乳類を家畜として飼うことがなかった。弥生時代以降になって、中国大陸や朝鮮半島から入ってきた牛や馬は役用であり、農作業や乗り物を曳く動力など、人間の仕事を手伝うための動物として飼育された。インドの神や仏が生きもの（牛や馬・ゾウ・鳥など）に乗って表現されるように、馬はたぶん、大和朝廷に取り入れられた時から支配階級を表すための乗り物であったであろう。例えば篠田信一「殴り合う貴族たち」（柏書房）では『「たとえ大臣の地位にあるものであって、他の大臣の居宅の門前を通ってはならない」というのが、王朝貴族社会における門前の儀礼であった。そして、この場合「門前を通ってはならない」というのは、厳密には「牛車に乗ったままで通ってはならない」ということであったわけだが、おそらく、そこには、「馬に乗ったままで通ってはならない」という意味も含まれていたのだろう。牛車での通過を許さない人びとならば、当然、騎馬での通過も許されなかったはずである。』というように、古来、世界的に人間が乗り物に乗るということは権威の象徴であった。馬のような大型の動物を見たことがない日本列島の人びとにとって、馬はとても大きな動物に見えたであろうし、その馬を金ピカに飾り、乗る人は彼らの支配者に相応しい人物に見えたに違いない。そうした馬とその上に乗る人物への畏敬観念は近代まで続く。人びとの心を支配したい人たちはそうしたことを巧みにに利用した。政治的にも宗教的にも。ついでながら、金日成がスターリンの意向を受け、朝鮮半島の統治者として人びとの前に現れた時は白馬に乗っていたらしい。神の馬である白馬に乗った男は朝鮮半島の英雄として自分自身をプロデュースしたのだが、後にそのプロデュース方法は息子の金正日に引き継がれ、孫の金正恩までもが自身の乗馬姿を、朝鮮半島の英雄・統治者としてのイメージを大衆に与えるための宣伝映像として利用している。

しかし、その馬も牛も、日本では食べ物として家畜化されなかった。ここのところが「日本人

の心・文化」を考えるうえで重要なところであると私は思う。仏教が日本に取り入れられたから家畜や哺乳動物を食べなくなったのではなく、もともと陸上の動物に頼らなくても生きていけるほど海棲生物や食用植物が豊富であったから、すんなりと仏教の殺生戒が広まったのではないだろうか。平野部が少なく海岸線がとても長いという環境で生活しており、もともと牛や馬のような大型の草食動物がいなかったことが、人びとを牧畜ではなく、海や川の生きものの活用に目を向けさせたのではないだろうか。すぐ近くの中国大陸や朝鮮半島から多くの人とともに、いろいろな文化が入ってきたにもかかわらず、大型食用動物の牧畜が定着しなかったことの原因の一つと考えられる。シカやイノシシは縄文時代から主要な狩りの対象であった。特にイノシシは縄文時代から古墳時代に入っても重要な狩猟対象の動物であった。私は何度か猪の肉を食べたことがあるが、なかなかに美味い肉だ。豚肉よりも肉を食ったという実感が持てる旨味がある。イノシシの肉は仏教が大衆レベルまで拡がってからも食べられていた。鹿も食べられていたし、鹿皮は柔らかくしっとりとした感触で、武具には欠かせない材料だ。しかし、牛や馬は農耕などの役用としての役目を終えると、食べられることもなく、牛馬を解体し、膠などをつくる特殊集団に受け渡された。まだまだ私たち現代人は日本人の歴史的な生活や心を本当に理解していないように思える。明治以降取り入れられた「西欧の知識・学問から見た日本」を本来の日本の姿としてきた誤りは、これから正していかなけらばならないと思っている。

もともと大型草食動物を家畜として食べる習慣のなかった日本の姿は豊臣秀吉と宣教師との対話からも窺える。豊臣秀吉は１５８７年にイエズス会の司祭（パードレ）たちを呼びつけ、ガスパール・コエリョに四箇条の質問を行った。その３番目には「牛馬は人間に使える有益な動物なのに、なぜ食べるという道理に背く行為をするのか」（渡邊大門「人身売買・奴隷・拉致の日本史」柏書房）というものがある。これは車や荷物の運搬や農耕にたいへん役に立つ牛馬を食べるのは道理に反するという考え方が日本人全体にあったから、ポルトガル商人が日本人を奴隷として買い、朝鮮半島や中国大陸、東南アジアやインドの植民地に連れて行って使役させていたということを禁止させるにあたって、イエズス会が日本人キリシタんを煽動して寺社の破壊を行っていることも考慮して、日本の伝統文化を守ることを強調したのではないだろうか。ポルトガルは当初、アフリカへ侵攻し、現地の人を捕らえて奴隷としていた。それにたいしてローマ教皇のニコラス５世から勅書を与えられた。それは奴隷になっているほとんどの人はイスラム教徒であって、彼らをポルトガルに連れて行って、そこに住まわせることによってキリスト教徒に改宗するだろうから、「神の恩寵」であるとして、アフリカ人を奴隷にすることを正当化していた。（渡邊大門「人身売買・奴隷・拉致の日本史」）。

そうした歴史が日本でも行われていた。そこで秀吉は、それまで鉄砲などの戦争の武器として欲しいものを手に入れるためにポルトガル商人とセットになった宣教師を優遇していたが、かれらが日本人奴隷を買うことを禁止し、彼らに日本人を売り渡していた、主に九州の大名の動きを牽制し、国内統治の安定を図った。それが気に入らない宣教師ルイス・フロイスは国に帰ってから「日本史」を出版しヨーロッパに日本の風俗を紹介する本の中では、鉄砲などの武器を買い、新しい王としての風貌・文化を西洋に求めた織田信長がポルトガル商人とセットになった宣教師を優遇したことから織田信長を絶賛している。しかし、大きな戦争に勝ち国内統治を進める秀吉

から宣教師の活動を制限されたためだろう、秀吉にたいしては「身長が低く、醜悪な容貌の持ち主で」「極度に淫蕩で、悪徳に汚れ、獣欲に耽溺しており」（川崎桃太「フロイスの見た戦国日本」）と表現している。宣教師自身が日本人女性を奴隷として買い、性的関係を持っていた、流行の言葉で表現すれば性の奴隷としていたわけで、性の欲求不満と布教の制限の不満から極度に秀吉を醜く表現しているわけだ。他の国に行った商人や宣教師の書いた本もこうした事情を考慮すべきだろう。

　さらに脱線するが近代史を考えるうえで大切なことなのでお許し願いたい。

私たちは白人、黒人といった言葉を普通に使っている。しかし、白人っていったいどういう人なんだと考えたことはないだろうか。私は小学生の頃、観光地に遠足に行っていわゆる白人という人たちの男性をみて驚いたのはその背の高さとともに、色が白くないことだった。どこが白人なんだよって思った。全身毛むくじゃらで日本人よりもずっとゴリラに近いと思った。しかし、世の中は現在もまだ、欧米人を白人として表現している。これっておかしいんじゃないって誰も思わないのだろうか。肌の色で人種を分けるというのはいつから始まったんだって疑問に思わない？　黒人＝下等人種、黄色人＝中間、白人＝１番進化した人種という観念を、私たちは意識しないうちに植え付けられていたのだ。敗戦国だからというより、明治のころからそういう観念を学校などで植え付けられてきたのだ。でも、おかしいでしょう。先ず肌の色が白いということだ。イギリスの元首相キャメロンは真っ赤じゃないか。アメリカのトランプはどす黒い赤。白いのは鼻の毛だけ。私のよく見る衛星放送の各局を比べると1番白いのは韓国ＫＢＳ放送のアナウンサー。アナウンサー・キャスターの中では世界Ｉ白い、男も女も。アメリカもイギリスもほとんど赤か赤黒い。スペインは茶色。どこに白人がいるんだよって思う。それでは何故こうした肌の色による人種分けができたんだということだが、こうした肌の色による人種のわけかたは自称白人である欧米人が作り出したものなのだ。海外に膨張・侵略していた彼らは、自分たちの行為が正しいものとするために、一つはキリスト教を利用し、一つは進化論を利用した。絶対的に正しいキリスト教の教えを世界へ押し広げよと、ローマの宣教師達は世界各地へ商人とともに進出した。進化の頂点にある白人が劣った人種の国を征服するのは自然淘汰だということだ。そのために自分たちを白い＝優れた、高貴な、進化した人種というイメージを作り上げたのだ。その言葉は現在もなお使い続けられている。科学的な根拠など何もないのに、誰も大きな声で疑問を発することもない。

註1：各国の弓矢については、松尾牧則「弓道　その歴史と技法」（日本武道館）に多くの写真が載っていますので、興味のある方はぜひそちらをご覧下さい。

註2：メスリ山古墳は大和地方の首長級の人物の古墳だといわれている。

中3：「地霊の信仰は、稲作の段階に始まったとする説があるけれども、根菜植物や雑穀・イモ類などの食用が行われた段階にも存在した。それを暗示するものに、縄文時代の蛇体信仰がある。急に地下で冬眠し、夏には地表であやしくうごめく蛇は、森林や大地の精霊の化身としてうけとめられたらしく、地下に住みまた地表に姿を現して脱皮する蛇体は、地霊信仰と結びついていた

要素が濃厚である。」（上田正昭「神と仏の古代史」吉川弘文館2009年）

写真、図引用文献

図1、9、表紙絵　フリーソフトのベクトル図案集
図2～8，16，17　松尾牧則「弓道　その歴史と技法」（日本武道館平成25年）
図10　角川書店編集部編「日本絵巻物全集18巻　男衾三郎絵巻」（角川書店）
図11～14　小松茂美編集「続続日本絵巻大成第五巻　清水寺縁起・蒙古襲来絵詞　伝記・縁起篇」（中央公論社1994年）
図15　角川書店編集部編集「日本絵巻物全集第24巻　年中行事絵巻」（角川書店1968年）
図18，19　北海道博物館編集「夷酋列像」（「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞2015年）
写真1，4～7　国立民族学博物館展示室で著者が撮影
写真2、3　橿原考古学研究所付属博物館で著者が撮影

引用・主要参考文献（順不動）

福呂　淳監修　「弓道」（メイツ出版2016年）
楊　海英　「逆転の大中国史」（文芸春秋2016年）
渡邊大門　「人身売買・奴隷・拉致の日本史」（柏書房2014年）
繁田信一　「殴り合う貴族たち」（柏書房2006年）
佐藤洋一郎　「食の人類史」（中央公論新社2016年）
斎藤嘉美　「ビタミンＤは長寿ホルモン」（ペガサス2013年）
西村裕子監修　「魔女の秘密展」（中日新聞社・東映）
菊池俊彦編集　「北東アジアの歴史と文化」（北海道大学出版会2010）
星野紘・斎藤君子・赤羽正春編集　「神々と精霊の国」（国書刊行会2015年）
石毛直道　「日本の食文化」（岩波書店2016年）
石毛直道監修　朝倉敏夫・阿良田麻里子著　「くらべてみよう！　日本と世界の食べ物と文化」（講談社2015年）
『月刊みんぱく』編集部編「食べられる生きものたち　世界の民族と食文化48」（丸善出版　平成24年）
山田康弘　「つくられた縄文時代　日本文化の原像を探る」（新潮社2015年）
李成一・早乙女雅博編　「古代朝鮮の考古学」（雄山閣2002年）
石川九陽　『日本の文字ー「無性の思考」の封印を解く』（筑摩書房2013年）
萩中美枝・畑井朝子・藤村久和・古原敏弘・村木美幸「日本の食生活全集48　聞き書きアイヌの食事」（農村漁村文化協会2011年）
山口未花子・高倉浩樹　「食と儀礼をめぐる地球の旅」（東北大学出版会2014年）
瀬川拓郎　「アイヌの世界」（講談社2011年）
松尾牧則　「弓道　その歴史と技法」（日本武道館平成25年）
渡部　裕解説　「生業からみた北方民族の文化」（北海道立北方民族博物館2013年）
川島博之　「食の歴史と日本人」（東洋経済新聞社2010年）
山極寿一　「人類進化論」（裳華房2010年）
山極寿一　「暴力はどこからきたか」（ＮＨＫ出版2014年）
海部陽介　「日本人はどこからきたか」（文藝春秋2016）
網野善彦・森浩一　「馬・船・常民」（講談社2010年）
森　浩一　「敗者の古代史」（中経出版2013年）
片山一道　「骨考古学と身体史観」（敬文舎2013年）
古代学協会編・下条信行監修「列島初期稲作の担い手は誰か」（すいれん舎2014年）
佐々木高明　「新版　稲作以前」（ＮＨＫ出版2014年）
池橋　宏　「稲作渡来民」（講談社2008年）
工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館篇「ここまでわかった！　縄文人の植物利用」（新泉社2014年）

綾部恒雄編集　「文化人類学15の理論」（中央公論社2001年）
岸田　秀　　「史的唯幻論で読む世界史」（講談社2016年）
鈴木拓也　　「戦争の日本史3　蝦夷と東北戦争」（吉川弘文館2016年）
実松克義　　「アマゾン文明の研究」（現代書館2010年）
益田勝実　　「日本列島人の思想」（青土社2015年）
安斎正人　　「日本人とは何か」（柏書房2010年）
早乙女雅博　　「朝鮮半島の考古学」（同成社2000年）
崎谷　満　　「新日本人の起源」（勉生出版2009年）
小野正文・堤隆監修「縄文美術館」（小川忠博写真・平凡社2015年）
井口直司　　「縄文土器ガイドブック」（新泉社2014年）
松木武彦　　「日本列島の戦争と初期国家形成」（東京大学出版会2007年）
松木武彦　　「美の考古学」（新潮社2016年）
川崎桃太　　「フロイスの見た戦国時代」（中央公論社2013年）
エンゲルス　　「家族・私有財産・国家の起源」（新日本出版社2014年）
編集東京国立博物館・九州国立博物館・国立国際美術館・ＮＨＫプロモーション・朝日新聞社「特別展　始皇帝と大兵馬俑」
（東京国立博物館・九州国立博物館・国立国際美術館・ＮＨＫ／ＮＨＫプロモーション・朝日新聞出版社2015年）
伯仲　古月編集「三国演義　兵器」（湖南美術出版社）
石生柴郎・宇野隆夫・赤澤威編集　「武器の進化と退化の学際的研究　弓矢編　日文研叢書」（国際日本文化センター2002年）
奈良国立博物館『第六十七回「正倉院展」目録』（一般財団法人　仏教美術協会　平成27年）
小松茂美　　「続続日本絵巻大成第五巻　清水寺縁起・蒙古襲来絵詞　伝記・縁起篇」（中央公論社1994年）
松下隆章　　「新修日本絵巻10」（角川書店1975年）
角川書店編集部編集　「日本絵巻物全集第24巻　年中行事絵巻」（角川書店1968年）
角川書店編集部編集　「日本絵巻物全集第18巻」（角川書店1968年）
北海道博物館編集　「夷酋列像」（「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞2015年）
佐原　真　　「魏志倭人伝の考古学」（岩波書店2014年）
木佐敬久　　「かくも明快な魏志倭人伝」（富山房インターナショナル2016年）
上田正昭　　「神と仏の古代史」（吉川弘文館2009年）